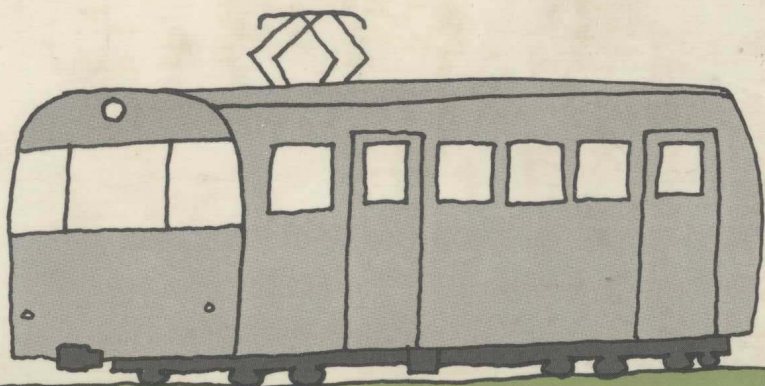


電車のある病院

斎藤茂太



電車のある病院



斎藤茂太

著者略歴

1916年東京生れ。慶応義塾大学医学部卒。精神神経科斎藤病院院長。日本精神病院協会副会長。日本旅行作家協会会長。

著書 『茂吉の体臭』『快妻物語』『茂吉の周辺』『精神科医三代』『飛行機とともに』『精神科の待合室』『モタさんの汽車の旅』『ヒコークィ談義』『神経質を喜べ』『診察室の窓から』『母子関係』など。

電車のある病院

一九七九年四月二十日 第一刷発行

定価 九三〇円

著者 斎藤茂太

発行者 伊藤金吾

発行所 北洋社

東京都千代田区富士見二二二一

電話 〇二六四〇五五一 二一〇二

振替 東京一―一三三二四三

印刷所 豊国印刷

製本所 大進堂

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

© Saigeta Saito 1979

I 医者の水流

茂吉の水脈 9

父のモーニング 9

親子 15

フォビア・テレフォニカ

19

茂吉と新宿 24

父茂吉の川と湯 28

医者の家 33

殺人未遂 33

バアヤ 35

早発性	39
珈琲と私	44
喜劇的なお嫁さんがいい	46
豊川稲荷のご利益	48
電車のある病院	53
鍵	53
ヒルメシ	57
下のはなし	59
クレッチメル教授	62
父の診察	66
書く	71
電車のある精神科病院	73
母親の気持	74
オフクロの世界旅行	81

Ⅱ もたもた対談——人間触診

桃井かおり——稀少価値の女優 89

森村桂——“わき目”を振れないひと 97

藤田弓子——前進する“同調性性格” 105

水森亜土——“逆”の女 110

村松英子——“品位”の役者 118

黒柳徹子——“クイクイ教”教祖 127

*

三木鮎郎——時代を先取りするチャレンジャー 135

虫明亜呂無——“男と女のこと”がわかる男 143

岡部冬彦——“正常”をこえた個性 150

おおば比呂司——“恐さ”を知るアーチスト 157

神田好武——“高所恐怖症”の飛行機乗り 164

植草甚一——“好奇心”の権化 172

Ⅲ 医事対談——現代を診る

鬱とアルコールの時代 河野裕明

181

老人の性と生 関増爾

197

医者になる素質 横山正義

212

現代人の夢みる眠り 鳥居鎮夫

228

Ⅳ 親子・夫婦・兄弟

傑作親子——輝子・茂太

247

育ちのちがう夫婦——茂太・美智子

264

まったく長男はソンだ

274

あとがき

290

電車のある病院

装幀
和田
誠

I

医者の水流

茂吉の水脈

父のモーニング

昭和五十年二月二十五日は父の二十三回忌であったから、ゆかりの方々をホテル・オークラへお招きした。

一周忌も、三回忌も、十三回忌も、会の司会を小林勇氏におねがいし、茂吉の法事とよべば小林勇と答えるというほどに、そのイメージが定着してしまった感じで、今回も思ったが、小林氏は近年脚を悪くされ、長い時間お立ち願うのはご無理と考えられたので、今度は巖谷大四氏に司会役を勤めていただいた。

追憶のお話をうかがったのは入江相政、谷川徹三、小林勇、安孫子^{あびこ}藤吉、柴生田稔、武見太

郎、谷口吉郎、大久保伝蔵、呉茂一、岡本太郎の方々で、献杯の音頭は鹿兒島壽藏氏がとって下さった。

お父上の時代から二代にわたっておつきあいをねがった入江相政侍従長には法事のたびに面白いお話をきかせていただいているが、会のあとでいいねいなお手紙をいただいた。今回は「皇太后さま」についてふれるいとまがなかったことをわびる、という内容だった。たしか三回忌の時だったと思う。私が冒頭の挨拶で、今夕はわが家の「皇太后」にご遠慮されることなく面白いお話をうかがいたいものです、と言ったのにつづいて、さっそく入江さんが「皇太后」という言葉をご採用になったというわけであった。私は「皇太后」という単語をべつに意図して使ったのではなく、その時突如として、きわめて自然に発想されたものだった。

入江さんのお話の一部はすでにうかがったものだったが、まるで初めて拝聴するような新鮮さを感じるのは入江さんの話術のおかげだろう。

陛下が戦後、初の地方ご巡幸で東北へいらしたときに、山形県上山温泉の村尾旅館にお泊りになった。それまでは、県庁とか公会堂とか学校とか、そういうところばかりをご利用になったのが、そのとき初めて「営業旅館」に泊られた。そして、旅館とは便利にできているものだとおっしゃった話。

また、父が陛下にご進講申し上げて、まことに唐突に、古今集の「否にはあらずこの月ばかり」を「女のさわり」でございまずと申し上げた話。このあたりは入江さんの得意とする守備範

困だ。私はいつか、その父の言葉に陛下がどんな反応を示されたかを入江さんに問うたことがある。

陛下はぐつとかまえられましたよ、と入江さんはおっしゃった。

雑誌「改造」に陛下のお歌がのったことがあった。父がお選びした七首であった。掲載誌が「改造」だったことを世間は面白がり、陛下へ歌の注文が殺到した。これではヒロポンでものまなきややりきれない、と陛下はおっしゃったという。ここで当夜の参加者はどっと笑った。

ちょうどヒロポン中毒はなやかなりし頃で、ヒロポンを用いざれば人に非ず、といった時代だったが、陛下さえもヒロポンという「しもじも」の単語をお使いになったという親近感をもった面白さからの笑いであつたであらう。

さて、これからがこの文章の主題である。入江さんは、父が上山で陛下にお話を申し上げたとき、さんざん考えたあげく、ヒゲをかりそろえてきたという話のついでに、父がその日着ていた紺の縦じまの服を「しゃれた背広」と表現なさった。

実はその服は父の文字通りの一張羅で、私もずいぶん長い間見慣れた服で、決して「しゃれた」ものではなかった筈である。しかし入江さんの目には「しゃれた」とうつたのである。

何事をも善意に、よく、よく解釈する人と、何事をも意地悪く、悪く悪く解釈する人がいる。

ニューヨークのスラム街の少年たちをある心理学者が調査したら、そこに住む貧しい少年たち

は、裕福な家の子供たちに比べて、コインの直径をずっと大きく見るといふ。環境つまり「育ち」の影響がここにあらわれる。

この「しゃれた」とみたのは何といつても入江さんの「お育ち」からであらう。もっともほんとにそれは「しゃれた」仕立てであつたかも知れないが、私には、父と「しゃれた」とは到底結びつかない。

それから話はいよいよ文化勲章のことにうつる。

昭和二十六年十一月三日のことだ。宮中には母と私と、それに犬丸秀雄氏が同道したがむろん我々は控えの間から先へは行けない。

陛下の御前へ、足もとの危ない父を入江さんは抱きかかえるようにして進んで下さつた。入江さんが止まろうとすると父が一步踏み出してしまい、入江さんがもう一步前進しようとするとう父が止まってしまうので、二人の歩度がそろわず、入江さんは大いに苦労されたらしい。

その父の背中に手をまわされていた入江さんはこうおっしゃるのである。

先生のモーニングの生地はとてもやわらかく、ふわふわして、なんともいい感触でした。非常に上等な生地のように思いました。よく、ああいういい生地で、先生にモーニングをつくって差し上げた茂太さんや先生の奥様に私は御礼を申し上げたいくらいです。

入江さんはざっとこんなことを申された。

ここで私は冷汗をかくのである。

この冷汗はこれまで何回かかいた。

このはなしを入江さんは前にもどこかでおっしゃり、また文章にも書かれたからだ。

冷汗はなぜ出たか。

汗は生理的には体温調節のためにでる。精神的には感動によっておこる。ウソ発見器という装置は正式には皮膚電気反射のメーターを利用したものだ。ある言葉を「刺激語」としてきかせると、内心の感動がおこる。同時に皮膚に敏感に反応して発汗する。その発汗を電氣的にメーターに導くのだ。人間、ドキンとするとどんなに平静を装ってもたとえかすかにでも発汗するものなのだ。

私の冷汗はウソを衝かれたドキンよりも、恥かしさ、首をちぢめるような恥かしさ、自分だけが真実を知っているというくすぐったさなどから発生したものであるらしい。

女房の美智子との結婚話もち上がり、進行し、両家が正式に顔合せしたのが昭和十八年の初夏であったと思う。顔合せの場所は銀座の竹葉本店だった。竹葉だからウナギが主役だが、戦争たけなわで材料不足、叔父の西洋が津久井溪谷で釣ったのを持ち込んだりした。胸が一ぱいで食欲の起こらぬ若い美智子の分のウナギを「それ僕にちょうだい」と奪っていったのは無類のウナギ好きの父であった。

まだ学生気分ぬけやらぬ無給医局員の私は、スフ入りの背広は何とか持っていたが秋に迫った式のためにモーニングを作らねばならなかった。すでに衣料切符の時代で国民服はともかく

モーニングなど作ってくれそうな洋服屋はなさそうだった。それでもあちこち探し回ったあげくやっとモーニング生地を置いてある洋服屋をみつけた。銀座三越の洋服部だった。まさに地獄に仏だった。

生地がいい悪いなど問題ではなかった。生地があるだけで万歳を叫ばなければならない状況だったから私は夢中で注文したわけである。やっと出来上がったのをつらつら眺めると成程ひどい生地だった。毛と毛の間から基礎になる本地がみえるようなしろ物だった。

その哀れなモーニングを着て昭和十八年十月に私は結婚式をすませた。そして間もなく応召し、自宅も病院も焼け失せ、国敗れて私はもどって来た。数年を経て世の中がやっと落ちついた頃、私の社会生活にモーニングが必要となってきた。思い出の例のモーニングは幸いに焼け残ったが、もう恥かしくて着られなかった。私は「ちゃんとした」のを新しくつくった。

父が文化勲章をいただくことになった。母と私がついて行くことになった。父にモーニングが必要だったが父は焼いてモーニングを持っていなかった。時間がなくてつくりとまはなかった。「ちゃんとした」のは私の身体からだに合せてあるから父には無理だった。古いのを父に着せてみると意外に似合った。

かくて父は私の「古く」「ひどい生地」のモーニングを着て宮中に参内さんないし、入江さんの手がその生地にふれ、入江さんをして「素晴らしい」生地と錯覚させたのだ。私がちぢみ上がつて冷汗をかいても無理はなからう。